

資料紹介 『明治二十二年三月十日欧行日記』

松浦 誠

はじめに

本稿は、近代日本の蚕糸業の発展に寄与した養蚕家・木村九蔵（弘化二年〔一八四五〕～明治三十一年〔一八九八〕）と養蚕伝習結社・競進社、及び木村家に関する本庄市が所蔵する資料群のうち、『明治二十二年三月十日欧行日記』（以下、『欧行日記』とする）について写真撮影を行い、資料紹介をするものである。なお、本稿では、『欧行日記』のうち、特に『欧行日記』の特徴がよく現れている五月五日から五月十四日までについて焦点を当てたい。

一 木村九蔵について

九蔵は、弘化二年（一八四五）に上野国緑埜郡高山村（現在の群馬県藤岡市）で高山寅蔵・さよの五男として出生した（幼名は巳之助¹⁾）。後に高山社を組織する高山長五郎（文政十三年〔一八三〇〕～明治十九年〔一八八六〕）を実兄に持つ。安政四年（一八五七）、多胡郡日野村（現在の群馬県藤岡市）の隠宅で父・寅蔵の世話の傍ら、その二階で養蚕を行い収繭に成功した。このことを契機に、九蔵は養蚕改良に取り組み始めた。安政五年（一八五八）から長五郎と共に養蚕を開始するものの白

きよう病のために良繭を得られず、飼育環境について試行錯誤を重ねた結果、文久元年（一八六一）火力を用いて温湿度を調整することで良繭の収繭に成功した。この養蚕法の改善を重ね、明治五年（一八七二）に養蚕飼育法「一派温暖育」として発表した。また、蚕種の改良にも取り組み、明治十四年（一八八一）に新品種・白玉新撰を発表し世に広めた。

九蔵は、自身の養蚕法を独占することなく、養蚕農家への伝習にも注力した。明治十年（一八七七）には九蔵が伝習した養蚕法を行う養蚕家らを集めて養蚕改良競進組を結成、教授員による組員への指導と希望する地域への巡回教師の派遣を開始した。そして、養蚕改良競進組の組員が次第に増加したことを受け、明治十七年（一八八四）十一月に蚕業結社・競進社へ改組し、児玉郡新宿村（現在の神川町）の自宅に本社を置いた。さらに、児玉郡児玉町（現在の本庄市）に出張事務所と養蚕伝習所を設置し、全国的な養蚕伝習を開始した。その後も、明治二十四年（一八九一）、本庄町（現在の本庄市）に日本蚕種貯蔵会社を設立し翌年より蚕種預託を開始したほか、明治三〇年（一八九七）、競進社蚕業講究所を開設し科学に基づく蚕業教育に注力するなど、蚕糸業の発展に寄与した。明治三十一年（一八九八）一月二十九日、五十四歳で病没した。

二 明治二十二年の伊仏視察員の派遣について

明治二十二年（一八八九）の伊仏視察員派遣の経緯については、長野県小県蚕業学校同窓会著『三吉米熊先生』²⁾に記されている。これによると、明治二十一年（一八八八）八月に三吉米熊から蚕糸業の実情を聴取した農商務大臣・井上馨は、同年十月十五日・十六日に全国から十八名

の蚕糸業家を集めて会議を行い、代表者四名のフランスへの派遣が決定された。

その後、明治二十二年（一八八九）二月二十七日、農商務省技師・高島得三（一八五〇～一九三二）がイタリア・フランス両国における蚕糸業の調査を内閣より命じられた。^③この伊仏視察の任には、「蚕業に老練の名聞ある者」として、長野県に出仕し蚕業教育に務め、後に上田蚕糸専門学校（現信州大学繊維学部）教授となった三吉米熊（一八六〇～一九二七）をはじめ、国内初の民間蒸気製糸工場・六工社（長野県埴科郡西条村）の創業者である大里忠一郎（一八三五～一八九八）、群馬県吾妻蚕種製造者で群馬県議會議員として県内蚕糸業の発展に尽力した田中甚平（一八五六～一九三三）、競進社長の木村九蔵の四名が委嘱された。また、農商務省技師・高島得三が蚕糸業視察を命じられた背景には、明治十七年（一八八四）から明治二十一年にかけて欧州に留学し森林視察を行っており、当時の農商務省における数少ない渡欧経験者であったことが挙げられる。なお、視察員派遣の背景には、明治十八年（一八八五）に制定された蚕糸業組合準則に基づく蚕糸業組合が抱えていた課題があり、組合内での連携が不十分で苦情も出ている状況に対し適切な対処を行うため、国内外の蚕糸業の実情を把握する必要があった。

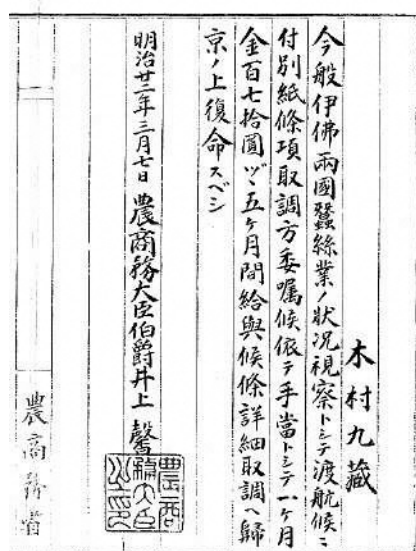
ここで、農商務省より委嘱された視察内容について、木村九蔵宛ての委嘱状（本庄市所蔵）をもとに見たい（写真）。伊仏蚕糸業視察について、委嘱状には左記のように記されている。

木村九蔵

今般伊仏両国蚕糸業ノ状況視察トシテ渡航候ニ付別紙条項取調方委嘱候依テ手当トシテ一ヶ月金百七十円ヅ、五ヶ月間給与候条詳細取調へ帰京ノ上復命スベシ

明治二十二年三月七日農商務伯爵大臣井上馨（印）

この中で委嘱期間を五ヶ月間としているが、これは実際に視察を行った四月から八月までを指すものであり、往復の期間は含まないと思われる。また、視察内容については、別紙で三十六項目に及び指示されている。^⑦その内容は、表一のように大別することができ、蚕糸業に関する官民の制度や規則、関連する組織や組合など、主に蚕糸業に関する制度・組織についての視察が求められていた。特に、蚕糸業組合に関する内容が全項目の約四割にも及び、農商務省がとりわけイタリア・フランスの蚕糸業組合の先進事例への関心が高かったことがうかがえる。^⑧なお、長野県小県蚕業学校同窓会著『三吉米熊先生』では、伊仏視察の目的として人造絹糸の視察が挙げられているが、委嘱状にある絹糸に関する視察項目は第二十六項の絹紡糸「アンテジー」の調査のみである。^⑨そのため、委嘱状を見る限りでは、明治二十二年の伊仏蚕糸業視察において人造絹糸の視察は主たる目的として行われなかったと考えられる。



（写真）「委嘱状」

【表二】 委嘱状に記された視察内容

一	主な内容	該当項
一	伊仏蚕糸業発展の順序	第一
二	伊仏中央政府・地方政府から蚕糸業者への規則・準則	第二、三
三	蚕糸業組合（成立ち、政府の干渉、規則、組織構造、会計、役員の選任、組合員管理、蚕種生糸等の検査）	第四、十七
四	桑園（課税、仕立て方、栽培方法、栽培品種の分配法）	第十八、二十
五	養蚕室の構造	第二十一
六	養蚕家（製糸家との関係、小作法、桑苗販売者・植桑者、養蚕家、製糸家各間での利益分配法や連絡法、生糸賃線の際の繰賃、養蚕家が協同運営する製糸工場的事例）	第二十二、二十五
七	「アンテージ」の実態と価格	第二十六
八	織物製糸業者に関する法律の改正	第二十七
九	製糸工場の女工雇用（約定書・履歴書の雛形、幼年の女工の雇用形態）	第二十八、三十
十	伊仏国の農会（組織、部長会頭職の官民の割合、製糸業が農会に属するか否か）	第三十一、三十三
十一	農産物の内、多額の物とその利益	第三十四
十二	特定の職業について官民共同の組織の有無と組織方法	第三十五
十三	不動産の民間所有	第三十六

出典：『伊仏両国蚕糸業状況視察復命書』（一八八九年、本庄市蔵）より

作成。

次に、イタリア・フランスへの蚕糸業視察の行程について概要を示しておきたい。視察員ら五名は、明治二十二年三月十日午前九時に横浜港を出航し、インド洋を経由して、同年四月十八日午前二時にフランス・マルセイユ港へ到着し、イタリア・フランスの蚕業学校や養蚕農家、製糸工場などに視察へ赴いた。⁽¹⁰⁾ イタリア・フランスでの視察は明治二十二年九月頃まで及び、木村九蔵・田中甚平・高島得三の三名は、同年九月八日にマルセイユ港を出航し、同年十月二十一日に横浜港へ帰航した。一方、大里忠一郎は、明治十九年三月より農商務省の命によりドイツ・

フランスへ留学を命じられ欧州に滞在していた福羽逸人に随行し、アメリカを経由して同年十月二十三日に帰国した。また、三吉米熊は、農商務省から委嘱された調査期間の満了後もイタリア・フランスで留学を続け、明治二十四年七月に帰国した。なお、イタリア・フランス視察で得られた知見については、九蔵の講演をまとめた『木村九蔵君演説筆記』（一八九〇）や、三吉米熊が記した『伊仏蚕業事情』（一八九二）にまとめられている。

三 資料の概要

（一）『欧行日記』から見た視察の様子

『欧行日記』は、九蔵をはじめとする視察員らが横浜港を出発する前日の明治二十二年三月九日から記述が開始されている。日記には断簡や落丁が見られ、五月十五日、十六日、二十二日、六月九日、十一日、六月十四日、七月十日、八月十六日、九月二十日、十月五日、二十一日の記述は不明である。一方で、横浜港出航前日から調査期間満了直前の八月十五日までは、その日の行動や視察先で見聞した内容が図を交えながら詳細に記載されている。ただし、本資料はあくまでも九蔵の日記であることから、九蔵以外の視察員の視察中の行動については、九蔵と行動を共にした場合を除き、追うことは出来ない点は留意されたい。ここでは、『欧行日記』の記述を基に、九蔵による視察の行程と主な行動についての示すこととする。

九蔵ら五名は、明治二十二年三月十日午前九時に欧州へ向けて横浜を出航した。往路では、神戸、呉淞、上海、香港、サイゴン、シンガポール、

コロンボ、アデンに寄港しながら、スエズ運河を経由して、四月十八日午前二時、フランス・マルセイユ港に到着した。往路では、朝昼夕の湿度や天候、海上から見える風景について記録し、寄港した際には港や付近の公園の植生や土壌、現地人の容姿などを記している。なお、湿度と天候については、マルセイユ港到着後も移動日を除いて記録しており、温湿度に対する九蔵の関心の高さがうかがえる。

マルセイユ港に到着した九蔵らは、四月十八日午後一時四分マルセイユから汽車に乗り、同日午後十時四分にフランス南東部の都市リヨンへ到着した。リヨンでは、日本初の生糸直輸出専門商社である横浜同伸会社の社員や在リヨン領事官からリヨン周辺地域の蚕糸業について説明を受け、公立生糸試験場の視察を行った。視察以外の記述については、在リヨン領事・大越成徳（四月十九日）や横浜正金銀行リヨン出張所長・川島忠之助（四月二十四日）に招かれ日本料理を馳走になり、その献立も詳細に記されている。また、四月二十六日には、農商務省より四月から七月までの手当金二千六百三十一フラン六十サンチームが横浜正金銀行を通して支払われたとの記述もある。このことから、九蔵ら視察員はリヨンでの手当金支給までの行程については自己負担であったことがうかがえる。なお、リヨン到着時点では掃立前であったため、掃立から二眠起きまでを区切りとして、イタリア視察後フランス視察を行う者とその逆の行程をとる者と二手に分かれることとなり、九蔵は、田中甚平、高島得三と共にイタリアから視察を行うため、四月二十七日午後八時にイタリア・ローマに向けてリヨンを出立した。

九蔵ら三名は、四月二十八日午後十一時イタリア・ローマに到着した。イタリアでは、ローマ、パドヴァ、メストレ、ミラノ、チュラン（トリノ）を拠点として、周辺の養蚕農家や蚕種農家、製糸場、桑苗商店、養

蚕実業学校の視察を行った。特に、パドヴァでは養蚕実業学校に五月七日から同月十一日まで通い、校長ヴェルソン氏や次長クワイアット氏に連日質問をしていた様子が記されている。約二ヶ月半にも及ぶイタリアでの視察の後、七月十三日午前八時三十分フランスへ向けてイタリア・チュラン（トリノ）を出立した。

七月十三日午後八時四十七分にフランス・リヨンに到着した九蔵ら三名は、七月十五日までリヨンに滞在した。この間は、七月十四日に開催したフランス革命百周年を祝う祭や、同月十五日に横浜正金銀行から出金した旨が記されている。その後、七月十六日午後二時二十五分にリヨンを出発し、同日午後十一時四十五分にパリへ到着した。九蔵らは七月十七日から八月二日までパリに滞在し、当時開催されていたパリ万国博覧会へも赴いている。

八月三日午前九時にパリを出発し、午後六時三十分イギリス・ロンドンに到着した。『欧行日記』を見る限りロンドンでは蚕糸業に関する視察はなく、ロンドン市内の観光地や公園、博物館を見物しながら八月七日まで滞在した後、同日パリへ戻った。

その後、九蔵らは八月九日にパリを出立し、同日午後十時頃にリヨンへ到着した。リヨンでは、「養蚕巡回」との記述があるが、具体的な内容については記されていない。また、九月八日にマルセイユ港から日本に向けて出航予定であったことが八月十五日までの記述から明らかである。八月十六日～九月二十日のページが失われているためマルセイユ港出航前後の行動は不明だが、九月二十五日にコロンボに到着していることから、往路と同様の航路で帰国したと考えられる。その後、十月二十一日に帰国した。

(二)『欧行日記』の特徴

『欧行日記』の特徴として、その日の出来事や行動、観察した内容を詳細に記載していることが挙げられる。例を挙げると、明治二十二年五月五日から五月六日にかけてイタリア・ローマからパドヴァへ鉄道で移動した際には、汽車が各駅に停車した時刻と駅間の土壌や植生を日記に記している。特に、桑園や養蚕農家が車窓から確認できた際には、図を交えながらその特徴と日本との比較を細かく記しており、移動中にも視察を行っていたことがわかる。この細やかな記録は蚕糸業に関する内容以外にも見られ、日々の天気や温湿度、滞在したホテルの名称、歓待を受けた際の食事などにも及び、九蔵の観察力や何事も書き留める性格であったことがうかがえる。

勿論、蚕糸業の視察で各所を訪れた際に見聞した内容も『欧行日記』に記載されている。本稿では二つの事例を紹介したい。一つ目が、五月七日～十一日にパドヴァ蚕業実業学校へ視察した際の記述である。蚕業実業学校への視察の際に学校長ヴェルソン氏から蚕種保存の重要性を説かれたことを契機として、九蔵は明治二十五年に日本蚕種貯蔵会社を設立し、人工の蚕種貯蔵庫での蚕種保管の委託を開始する。そのため、全体の行程を通して九蔵のその後の活動に最も影響を与えた視察先とも言える。『欧行日記』では、ヴェルソン氏への質疑応答の内容について「別冊二記載置ク」とあり記述されていないが、五日間午前九時から午後五時まで、蚕業実業学校が繁忙となる直前まで熱心に通い、ヴェルソン氏や次長クワイアット氏と質疑応答を行ったことが記されている。

もう一つが、五月十三日にパドヴァ近郊の蚕種農家ピエトロ・モター氏宅を視察した際の記述である。モター氏は、明治十三年に買い求めた日本産の蚕種を複製しており、年々良繭となっていると記されている。

一方で日本産蚕のとイタリア産蚕を掛け合わせた蚕も生産しており、この蚕同士で掛け合わせた結果について「糸ノセンイ繭形状等二至リ悉ク良品出来ス」とあり良質の繭となったようである。このことは、一代交雑種の先進事例を聞き取ったものと考えられる。また、モター氏からは掃立時に蚕箔へ蚕を移す様子や蚕の生育段階毎の給桑時間、養蚕の際に目標となる温湿度、繭の病原検査、作業員の雇用、桑樹の栽培法、桑葉の売買相場、掃立する蚕卵量や蚕卵一オンスあたりの売買価格など、様々な内容を聞き取っている。特に、道具類や蚕室の構造については文章で記すだけでなく図表でも記録しており、モター氏宅で視察した内容をより詳細に持ち帰れるよう努めていたことがうかがえる。なお、モター氏とは、フランス・パリへ移動後にも書簡で連絡を取り合っており、イタリア産蚕種と日本の蚕種とを交換する旨のやり取りを行っていた。

おわりに

本稿では木村九蔵が記した『欧行日記』について、特徴と記述されているイタリア・フランスへの蚕糸業視察の様子について紹介してきた。本資料からは、現地で見聞した視察の内容だけでなく、養蚕家として養蚕改良に注力してきた九蔵の観察力の一端を見ることができた。本資料を今後の九蔵や競進社の研究及び展示に生かしていきたい。また、本市では、『欧行日記』以外にも九蔵の関係資料を数多く所蔵しており、これらの集成・紹介は今後の課題としたい。

註

- (1) 木村九蔵については、中村高樹『蚕飼の鑑…故競進社々長木村九蔵先生』(一九〇〇年)、本庄市教育委員会文化財保護課『本庄の養蚕と製糸―養蚕と絹のまち本庄―』(二〇一二年)を参照した。
- (2) 長野県小県蚕業学校同窓会『吉米熊先生』(一九三〇年)。
- (3) 農商務省によるイタリア・フランスへの視察員派遣の経緯については、日本蚕業雑誌社編『日本蚕業雑誌第十七号』(二八八九年)の「蚕業視察者の洋行」(三四四頁～三五五頁)を参照した。
- (4) 註(2)と同様。
- (5) 江口善次、日高八十七編『信濃蚕糸業史上巻』(一九七五年)。
- (6) 島田斎胤『上毛吾妻百家伝』(一八九六年)。
- (7) 『伊仏両国蚕糸業状況視察復命書』(一八八九年、本庄市蔵)を参照した。
- (8) 明治二十二年時点での農商務省の蚕糸業組合に対する関心の高さは、蚕業雑誌社編『日本蚕業雑誌第十七号』(一八八九年)の「井上農商務大臣の蚕業意見」(二八八頁～二八九頁)に記載がある。この記事では、農商務大臣井上馨が生糸買込商人らから蚕糸業に関する意見陳述を受けるなかで、当時の国内蚕糸業組合が抱える問題に対し、容易に手を下すべきではなく、イタリア・フランスの蚕業の実況を調査し、その結果を以て処理をすると述べられている。
- (9) 委嘱状第二十六項ではアンテジーについて、『製糸の後繭に残りたる糸の分を紡績したる仏語「アンテジー」とある。一方で絹紡糸とは、蚕糸業の過程で生じる製糸に不適の繭や、製糸業の過程で生じる生皮苧や熨斗糸といった副蚕糸を加工して生産するものである。アンテジーの説明にある製法とも一致していることから、アンテジーは絹紡糸を指すものと考えられる。なお、明治二十二年のバリ万国博覧会には人工絹糸が出品されていた。この人工絹糸は、イレール・ド・シャルドネが開発したレーヨンであり、植物に含まれるセルロースを硝酸と硫酸の混合液で溶解し繊維状に加工したものである。
- (10) イタリア・フランスへの視察員派遣の概要については、註(2)に加え、三吉米熊『伊仏蚕業事情』(一八九二年)を参照した。

『明治二十二年三月十日欧行日記』翻刻(一部)

【凡例】

- 一、読みやすさを考え、新字体に改めた箇所がある。誤字がある場合には()に記した。また、傍線が引かれた箇所は、同様に示した。
- 二、書き損じについて、打消し線で消された箇所は翻刻でも同様に記した。塗りつぶされた箇所は●で示した。
- 三、図で示された箇所は、画像で示した。

五月五日 晴 午後三時五分夕立ノ氣雨直ニ止ム
寒暖計 ア六十六度
ヒ六十九度
夕

伊国羅馬府滞在ハ四月廿八日ヨリ五月四日夜迄
ビヤフチーナ（羅馬府ノテール 即チ羅馬府名） オートル、アングロー、
アメリカン、ニ止宿ス

本日伊国羅馬府午後一時五十分發ニテ同國、フロ
ランス、迄蒸汽車ニ乗ル同二時十五分ستنシヨ
ン此間ハ木場ノミニシテ田畑少ナク畑ハブドウ多
ク桑ヲマバラニ見ルモ芽吹早桑ハ五葉中桑ハ四
葉位開葉ス殊ニ線路左右ニ人家ヲ見ズ

第二 午後二時四十五分ستنシヨン前第一ト第二ノ間ハ
進行ハ北方作物ハ小麦ブドウ土色ハ赤白ノネン
土ニシテ砂土交リ地質不宜

第三 午後三時十五分ستنシヨン第二ト第三トノ間ハ
土色ハ白地ニシテ石砂交リ地質不宜進行同シ

第四 同三時三十五分ستنシヨン第三ト第四トノ間ハ
土質前同斷進行北方江向

第五

同四時〇七分ستنシヨン第四ト第五トノ間ハ土色
地位前同斷亦進行モ同シ此地ハ平山悉ク開熟シ
麦及菓物并ブドウ、ヲ作ル

第六

同四時四十分ستنシヨン第五ト第六トノ間ハ桑樹ナ
クブドウ多々作ル其作様ハ左圖ノ如シ其地小麦
ノミ生立ハ甚タよろしからず皆バラ時ナリ

第七

同五時五分ستنシヨン第六ト第七トノ間ハ寒地
土色白土ニ黄ヲ帯ヒ石砂交リニシテ此地ハ氣候
冷ナルカ桑樹ノ開芽遅シ地質宜シカラズト考フ
桑樹ノ植付アルハマバラニシテ我カ壺反歩ニ比
シ其木数未定ナリ然レドモ当地ノ株送りハ他ニ
異ナル其作様ハ圖ニ示シヲク



五月五日 晴

寒暖計

ア六十六度
ヒ六十九度

伊国羅馬府滞在ハ四月廿八日ヨリ五月四日夜迄
ビヤフチーナ（羅馬府ノテール 即チ羅馬府名） オートル、アングロー、
アメリカン、ニ止宿ス
本日伊国羅馬府午後一時五十分發ニテ同國、フロ
ランス、迄蒸汽車ニ乗ル同二時十五分ستنシヨ
ン此間ハ木場ノミニシテ田畑少ナク畑ハブドウ多
ク桑ヲマバラニ見ルモ芽吹早桑ハ五葉中桑ハ四
葉位開葉ス殊ニ線路左右ニ人家ヲ見ズ
第二 午後二時四十五分ستنシヨン前第一ト第二ノ間ハ
進行ハ北方作物ハ小麦ブドウ土色ハ赤白ノネン
土ニシテ砂土交リ地質不宜
第三 午後三時十五分ستنシヨン第二ト第三トノ間ハ
土色ハ白地ニシテ石砂交リ地質不宜進行同シ
第四 同三時三十五分ستنシヨン第三ト第四トノ間ハ
土質前同斷進行北方江向
第五 同四時〇七分ستنシヨン第四ト第五トノ間ハ土色
地位前同斷亦進行モ同シ此地ハ平山悉ク開熟シ
麦及菓物并ブドウ、ヲ作ル
第六 同四時四十分ستنシヨン第五ト第六トノ間ハ桑樹ナ
クブドウ多々作ル其作様ハ左圖ノ如シ其地小麦
ノミ生立ハ甚タよろしからず皆バラ時ナリ
第七 同五時五分ستنシヨン第六ト第七トノ間ハ寒地
土色白土ニ黄ヲ帯ヒ石砂交リニシテ此地ハ氣候
冷ナルカ桑樹ノ開芽遅シ地質宜シカラズト考フ
桑樹ノ植付アルハマバラニシテ我カ壺反歩ニ比
シ其木数未定ナリ然レドモ当地ノ株送りハ他ニ
異ナル其作様ハ圖ニ示シヲク



先付

第八

午後五時四十分ステーション第七ト第八ノ間二丑寅ノ方ニ当リ湖水アリ農事ハ前二同ジ

第九

同五時五十分ステーション第八ト第九トノ間農事ハブドウ小麦ニシテ桑樹ヲ見ス

第十

同六時五十分ステーション第九ト第十ノ間二市駅アリ農事ハ前二同シ最モニワカニ夕立雨直チニ止ム

第十一

同七時二十五分ステーション第十ト第十一トノ間ハ土色赤ネン土ニシテ地質カタシ故ニ諸作トモ生立アシク又桑樹ヲ見ルモ皆立木ナリ地質不宜ト信当地桑樹ノ図ヲ示ス



第十二

同七時三十分ステーション第十一ト第十二トノ間ハ前二同シ

第十三

サンジヨバン一宿名

午後八時ステーション第十二ト第十三ノ

間ハ夜行ニ付記セズ然レドモ桑樹ハ立木作りナリ

第十四

午後八時二十五分ステーション第十三ト第十四ノ間前同断示後本日ハ記セズ

第十五

午後八時三十分ステーション伊國フロランス着

伊國フロランス、ビヤデ、ハンサニ、ニ二三当地(宿名及番地)アルベルゴ、ボンチャニ、(ホテル名)ニ止

宿ス爰ニ滞在ニ泊ス

五月六日 晴午前薄曇同午前九時三十分雨直ニ止ム

寒暖計 本日ハ蒸汽車進行ニ付記セズ

本日フロランス第一ノ大寺ヲ見ル皆タイリ石ヲ以テ購造セシ其地行周囲二百五十間位イアリト見聞ス

当日午前第六時三十五分同所ヲ発車シ伊國パドワ



桑樹
立木作

五月六日 晴午前薄曇同午前九時三十分雨直ニ止ム
寒暖計 本日ハ蒸汽車進行ニ付記セズ
本日フロランス第一ノ大寺ヲ見ル皆タイリ石ヲ以テ購造セシ其地行周囲二百五十間位イアリト見聞ス
当日午前第六時三十五分同所ヲ発車シ伊國パドワ

同七時三十分ステーション第十一ト第十二トノ間ハ前二同シ
サンジヨバン一宿名
午後八時ステーション第十二ト第十三ノ間ハ夜行ニ付記セズ然レドモ桑樹ハ立木作りナリ
第十四
午後八時二十五分ステーション第十三ト第十四ノ間前同断示後本日ハ記セズ
第十五
午後八時三十分ステーション伊國フロランス着
伊國フロランス、ビヤデ、ハンサニ、ニ二三当地(宿名及番地)アルベルゴ、ボンチャニ、(ホテル名)ニ止
宿ス爰ニ滞在ニ泊ス

宿着車ス

第一

午前六時五十分ス、テーンシヨン「パドワ」ト第一トノ間
土色赤土質幾分宜シキ至ル麦作及ブドウ并
桑樹トモ生立宜シ桑樹ハ高木造リニシテ高サ壹
丈位



第二

伊國ビストリヤ

午前七時十五分ス、テーンシヨン第一ト第二トノ間ハ追
々山ニ遠ク平坦ニナル地質モ宜シク作物ハ小麦
ブドウ菓物桑樹等ナリ爰ニ我カ五畝歩位イ始メテ
桑畑ヲ見ル皆中株造リナリ

第三

午前八時五分ス、テーンシヨン第二ト第三トノ間桑樹ノ
造リ法ハ我カ高株造リニ似ル然レドモ株頭壹本
立ノ数八九株程付ケル又タ身木ヲ切り取ルモ
角切りニシテ新木ツエ、ナリ株ノ高サ四尺位イナ
リ



第四

午前九時二十五分ス、テーンシヨン第三ト第四トノ間
山ノ高キ所ヲ通行ス大ナルトンネルニケ所ヲ越
ヘ三ノトンネル入口ニ先車ノ荷物箱レールヲ
ハツレ箱ヲ積シ為メニ汽車通行スルアタワス依
テ此トンネルヲ歩行シ向フヨリ来リシ汽車ニ乗
進行走

第五

同十時五十分内午前九時三十分雨直ニ止ム車道最
山ノ高キヲ通行ス谷合ニ人家ヲ見ル此間第四第
五ノ間ナリトンネル数知レス

第六

同十時五十分ス、テーンシヨン第五ト第六トノ間
前記ノ如ク山ノ高キヲ通行ス同断ナリ

第七

同十一時十分第六ト第七トノ間最モ岩石ニシテ

宿着車ス

午前六時五十分ス、テーンシヨン「パドワ」ト第一トノ間
土色赤土質幾分宜シキ至ル麦作及ブドウ并
桑樹トモ生立宜シ桑樹ハ高木造リニシテ高サ壹
丈位



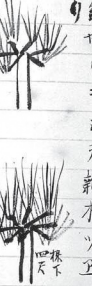
第二

伊國ビストリヤ

午前七時十五分ス、テーンシヨン第一ト第二トノ間ハ追
々山ニ遠ク平坦ニナル地質モ宜シク作物ハ小麦
ブドウ菓物桑樹等ナリ爰ニ我カ五畝歩位イ始メテ
桑畑ヲ見ル皆中株造リナリ

第三

午前八時五分ス、テーンシヨン第二ト第三トノ間桑樹ノ
造リ法ハ我カ高株造リニ似ル然レドモ株頭壹本
立ノ数八九株程付ケル又タ身木ヲ切り取ルモ
角切りニシテ新木ツエ、ナリ株ノ高サ四尺位イナ
リ



第四

午前九時二十五分ス、テーンシヨン第三ト第四トノ間
山ノ高キ所ヲ通行ス大ナルトンネルニケ所ヲ越
ヘ三ノトンネル入口ニ先車ノ荷物箱レールヲ
ハツレ箱ヲ積シ為メニ汽車通行スルアタワス依
テ此トンネルヲ歩行シ向フヨリ来リシ汽車ニ乗
進行走

第五

同十時五十分内午前九時三十分雨直ニ止ム車道最
山ノ高キヲ通行ス谷合ニ人家ヲ見ル此間第四第
五ノ間ナリトンネル数知レス

第六

同十時五十分ス、テーンシヨン第五ト第六トノ間
前記ノ如ク山ノ高キヲ通行ス同断ナリ

第七

同十一時十分第六ト第七トノ間最モ岩石ニシテ

前記ト同ジ

第八

同十一時二十五分ステーションシヨ／＼第七ト第八トノ間ハ前二
記スルニ同ジ

第九

同十二時十分第八ト第九ノ間ハ同シ

第十

午後十二時三十分「伊国ボロニヤ」ステーションシヨ／＼着第
九ト第十トノ間皆山林ニシテ殊ニ「アカシヤ」ト云
木多シ爰ニテ昼餐ヲナシ四時間休ム尤モ汽車乗
替ノステーションシヨ／＼ナリ

第十一

午後四時五十八分、ボロニヤ、ステーションシヨ／＼、発車同
所ヨリ伊国パドワ迄百三十式キロメートル（但シ四キロ
我力一里）
ニ充ツ）

第十二

午後五時五分第十一ト第十二トノ間地質宜シ

第十三

午後五時十八分、ステーションシヨ／＼、第十二ト第十三トノ間地質最
宜シ作物生立宜シ

第十四

午後五時二十五分ステーションシヨ／＼着第十三ト第十四トノ
間真土ニシテ最モ作物生立宜シ

第十五

午後五時四十分ステーションシヨ／＼第十四ト第十五トノ
間ハブドウ最モ多シ桑樹ハ立木作りニシテ他種物
ニ比スレバ我力壺町歩ニ付壺畝割ノ分合位ナリ



第十六

同五時四十五分ステーションシヨ／＼第十五ト第十六トノ間ハ
前二同シ

第十七

同五時五十五分ステーションシヨ／＼、第十六ト第十七トノ
間土色ハ白地ニシテ真土ナリ地質最モ宜シ農事
小麦ブドウ果物、麻等ナリ其内麻八十中ノ式分位
作スル由

前記ト同ジ

第八

同十一時二十五分ステーションシヨ／＼第七ト第八トノ間ハ前二
記スルニ同ジ

第九

同十二時十分第八ト第九ノ間ハ同シ

第十

午後十二時三十分「伊国ボロニヤ」ステーションシヨ／＼着第
九ト第十トノ間皆山林ニシテ殊ニ「アカシヤ」ト云
木多シ爰ニテ昼餐ヲナシ四時間休ム尤モ汽車乗
替ノステーションシヨ／＼ナリ

第十一

午後四時五十八分、ボロニヤ、ステーションシヨ／＼、発車同
所ヨリ伊国パドワ迄百三十式キロメートル（但シ四キロ
我力一里）
ニ充ツ）

第十二

午後五時十八分、ステーションシヨ／＼、第十二ト第十三トノ間地質最
宜シ作物生立宜シ

第十三

午後五時二十五分ステーションシヨ／＼着第十三ト第十四トノ
間真土ニシテ最モ作物生立宜シ

第十四

午後五時四十分ステーションシヨ／＼第十四ト第十五トノ
間ハブドウ最モ多シ桑樹ハ立木作りニシテ他種物
ニ比スレバ我力壺町歩ニ付壺畝割ノ分合位ナリ



第十六

同五時四十五分ステーションシヨ／＼第十五ト第十六トノ間ハ
前二同シ

第十七

同五時五十五分ステーションシヨ／＼、第十六ト第十七トノ
間土色ハ白地ニシテ真土ナリ地質最モ宜シ農事
小麦ブドウ果物、麻等ナリ其内麻八十中ノ式分位
作スル由

第十八
午後六時二十五分ステーション第十七ト第十八ト
ノ間土質前二同シ爰ニ伊國セラ、ト云町アリ最
盛工ノ所ナリト

第十九
午後六時五十分ステーション第十八ト第十九トノ間
ハ前二同シ

第二十
午後七時ステーション第十九ト第二十トノ間土質
宜シ爰ニボフ川アリ農事ハ小麦ブドウ養蚕及米
ヲ作ル最水便宜シク宜シキ土地ナリ

第二十一
午後七時十分ステーション第二十ト第二十一トノ
間ハ平坦ニシテ土地及地質宜シク麻ヲ多ク作ル

第二十二
午後七時二十分ステーション第二十一ト第二十二
間土質幾分力下等地ナリ土色ハ白地ニシテ桑樹
ハ高株作りナリ

第二十三
午後七時三十分ステーション第二十二ト第二十三
トノ間ハ土質宜シ亦桑樹モ生立宜シ

第二十四
午後七時五十分ステーション第二十三ト第二十四ト
間ハ夜二入記セズ示後同断

第二十五
午後八時十五分ステーション着

第二十六
午後八時三十分伊國サンテエライナ、ステーション
第二十七
午後八時四十五分ステーション着

第二十八
午後九時ステーション着

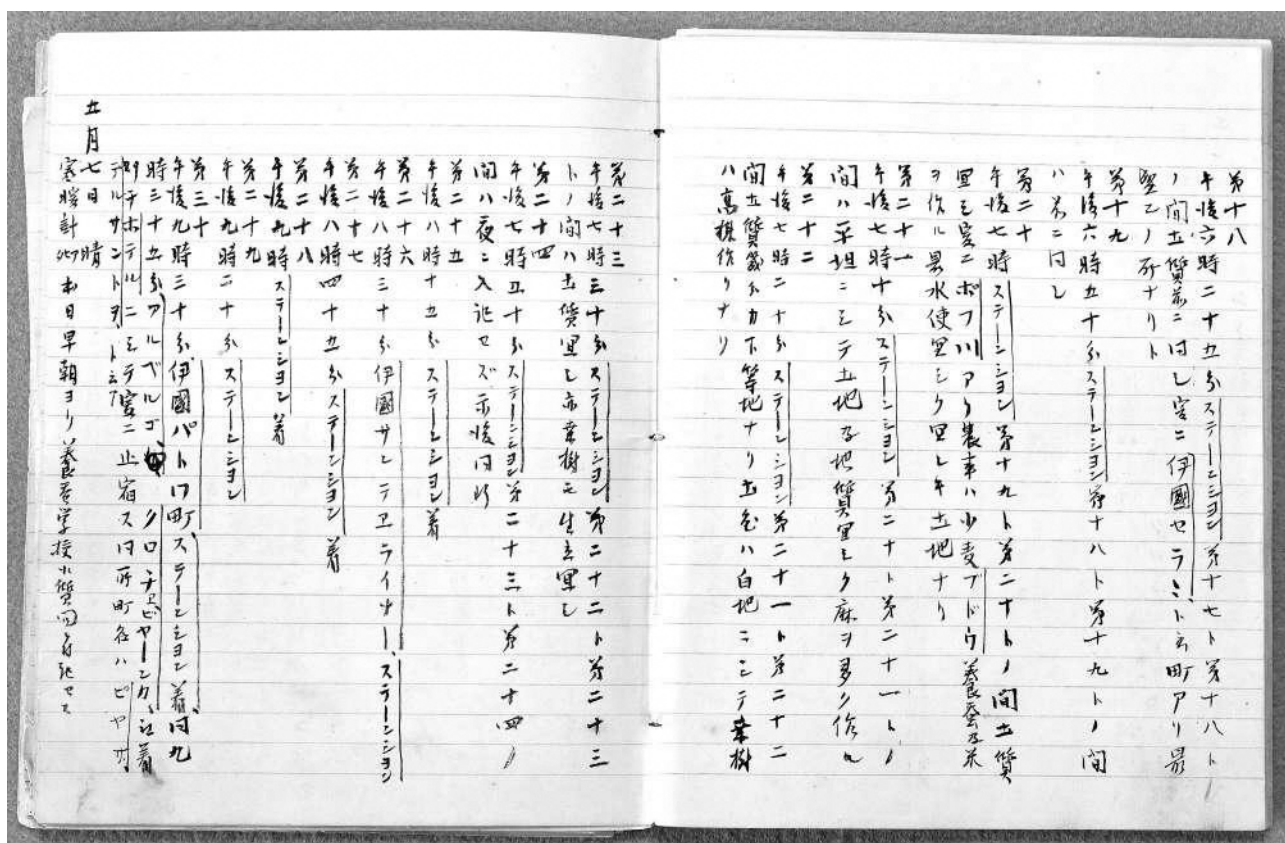
第二十九
午後九時二十分ステーション
第三十
午後九時三十分伊國パトワ町、ステーション着 同九
時三十五分アルベルゴ、●クロチエ、ビヤンカ、江着
則チホテルニシテ爰ニ止宿ス同町名ハビヤサ、
デルサントワ、ト云フ

五月七日 晴

寒暖計 本日早朝ヨリ養蚕学校御質問ニ付記セス

タピア

寒暖計 本日早朝ヨリ養蚕学校御質問ニ付記セス



本日午前九時伊国パドワ、シタシオネ、パコロ
ギカ、(町名)養蚕実業学校江出頭シ学校長ベルソ
同次長クワイヤット君ノ両長二面回シ夫レヨリ同所
校長ノ●安内ニテ諸器械及養蚕並ニ蚕室悉皆
見聞シ筆記ハ別冊ニ記載置ク同十二時退場ス
五月八日 晴

寒暖計 本日モ学校出頭ニ付記セズ

本日午前九時養蚕実業学校江出頭両長二質問
ヲナス終テ同十二時学校長ノ館舎ニ召カレ馳走
ヲ頂ク又午後二時出頭同質問ヲナシ午後五時退
場ス

五月九日 晴

寒暖計 本日モ前日ニ同ジ

本日午後九時出頭同十二時退場又午後二時出頭
質問ヲナシ同五時退場ス

五月十日 晴

寒暖計 七十三度

本日午前九時出頭同質問ヲナシ十二時ヲシテ退
場シ又午後二時出頭同質問終テ午後五時退場ス
当日十二時ヨリパドワ植物園ニ校長ノ安内状ヲ受
高嶋技師ノ御案内得又同所長ノ案内ヲ將悉ク見聞
ス●同所植物園ハ欧羅巴最モ古キ園ナリト聞
記元千五百四十四年ナリト

五月十一日 晴

寒暖計 六十八度
ヒ七十九度
タ七十二度

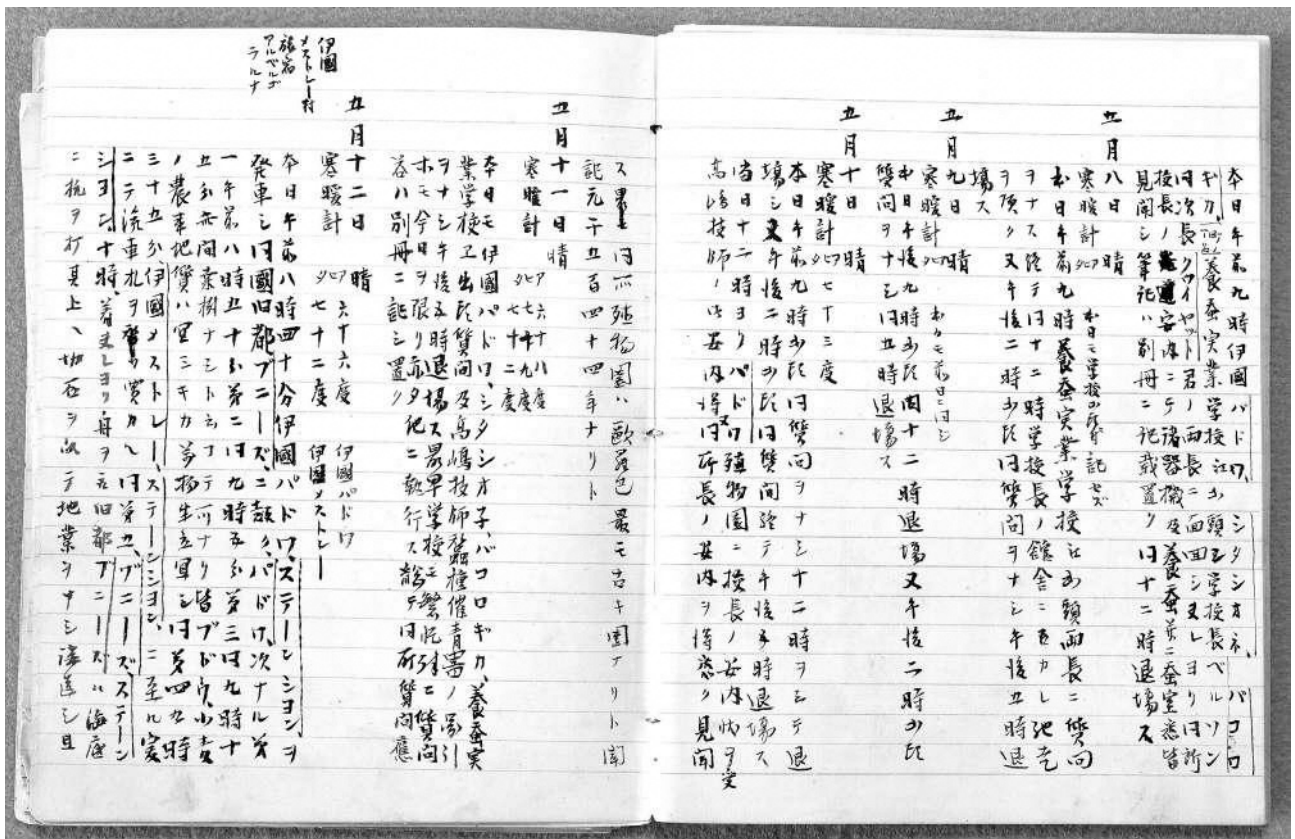
本日モ伊国パドワ、シタシオネ、パコロギカ、養蚕実
業学校工出頭及高嶋技師蚕種催青器の図引
ヲナシ午後五時退場ス最早学校モ繁忙殊ニ質問
等モ今日ヲ限り亦タ他ニ執行ス総テ同所質問応
答ハ別冊ニ記シ置ク

五月十二日 晴

寒暖計 六十八度
ヒ七十九度
タ七十二度

伊国
メストレー村
旅宿
アルベルゴ
ラルナ

本日午前八時四十分伊国パドワ、ステーション、ヨ
登車シ同国旧都ブニーズ、ニ赴ク、パドワ、次ナル第
一午前八時五十分第二同九時五分第三九時十
五分此間桑樹ナシト云フテ可ナリ皆ブドウ、小麦
ノ農事地質ハ宜シキカ万物生立宜シ同第四九時
三十五分、伊国メストレー、ステーション、ニ至ル爰
ニテ汽車札ヲ●買カヘ同第五、ブニーズ、ステーション、
十時、着夫レヨリ舟ヲ取旧都ブニーズハ海底
ニ杭ヲ打其上ヘ切石ヲ以テ地業ヲナシ講造シ且

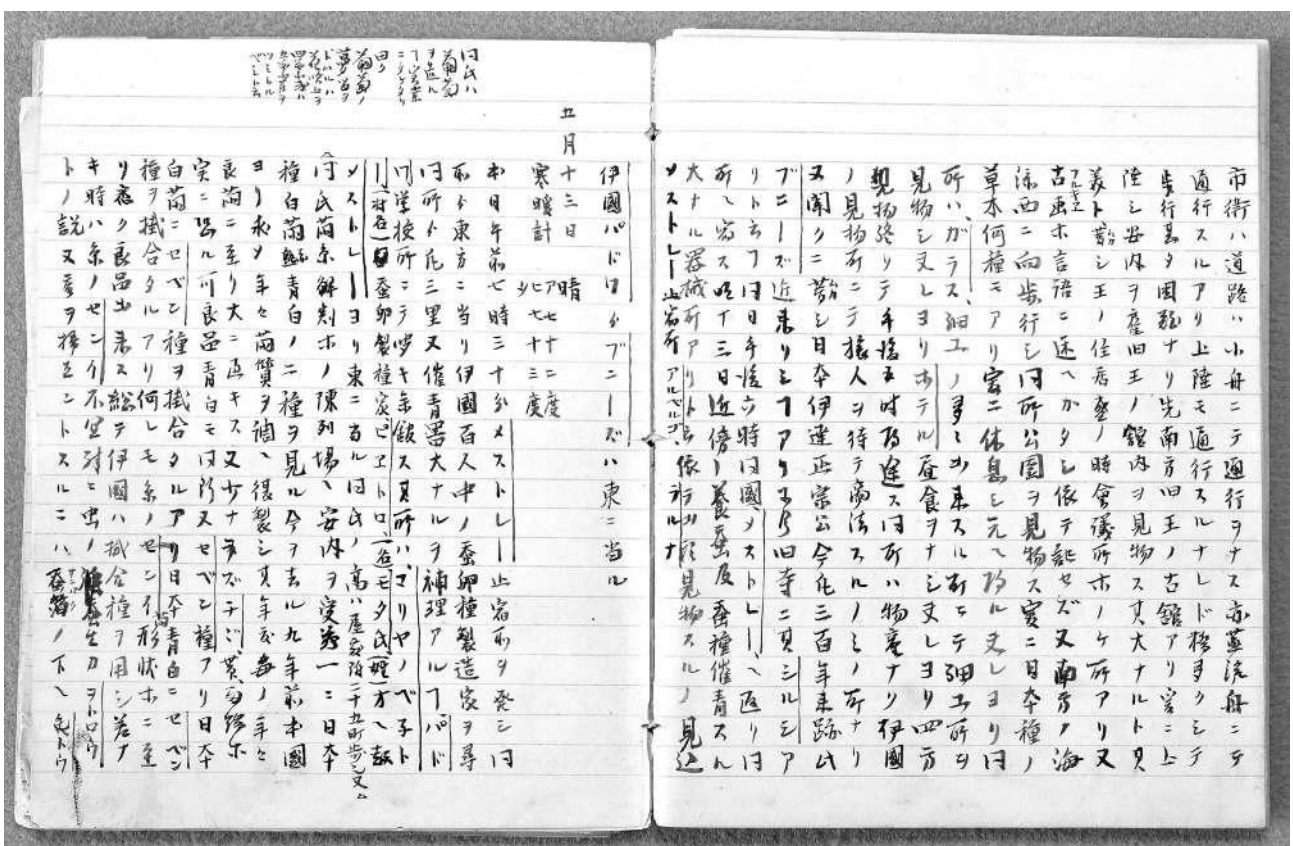


市街ハ道路ハ小舟ニテ通行ヲナス亦蒸汽舟ニテ
通行スルアリ上陸モ通行スルナレド橋多クシテ
歩行甚タ困難ナリ先南方旧王ノ古館アリ愛ニ上
陸シ安内ヲ雇旧王ノ館内ヲ見物ス其大ナルト只
美ト、昔シ王ノ住居盛ノ時會議所等ノケ所アリ又
古画等言語ニ述ヘガタシ依テ記セズ又南方ノ海
添西ニ向歩行シ同所公園ヲ見物ス愛ニ日本種ノ
草木何種モアリ愛ニ休息シ元ヘ帰ル夫レヨリ同
所ハ、ガラス、細工ノ多々出来スル所ニテ細工所ヲ
見物シ夫レヨリホテル屋敷ヲナシ夫レヨリ四方
見物終リテ午後五時帰途又同所ハ物産ナリ伊國
ノ見物所ニテ旅人ヲ待テ商談スルノミノ所ナリ
又聞クニ昔シ日本伊達正宗公今凡三百年來跡此
ブニズ迄来リシヲアリ尚是旧寺ニ其シルシア
リト云フ同日午後六時同國、メストレーヘ返リ同
所ヘ宿ス明十三日近傍ノ養蚕及蚕種催青スル
大ナル器械所アリト云依テ出頭見物スルノ見込
メストレー止宿所 アルベルゴ、ラルナ
伊國バドワのブニズハ東ニ当ル

五月十三日 晴

寒暖計 ア七十三度
タ七十三度

本日午前七時三十分メストレー止宿所ヲ発シ同
所ハ東方ニ当リ伊國百人中ノ蚕卵種製造家ヲ尋
同所ハ凡三里又催青器大ナルヲ補理アル、パド
ワ、学校所ニテ間キ參館ス其所ハ、マリヤノベ子ト
リ、(村名) ●蚕卵製種家、ピエトロ、(名)、モタ氏、(姓) 方ヘ赴
メストレーヨリ東ニ当ル同氏ノ高ハ屋敷付二十五町歩之又△
△同氏繭糸解剖等ノ陳列場ヘ案内ヲ受第一二日本
種白繭 熟赤青白ノ二種ヲ見ル今ヲ去ル九年日本國
ヨリ求メ年々繭質ヲ調ヘ復製シ其年度毎ノ年々
良繭ニ至リ大ニ直キス又少ナラズ升、貫兩端等
実ニ恐ル可良品青白モ同斷又セベン種アリ日本
白繭ニセベン種ヲ掛合タルアリ日本青白ニセベン
種ノ掛合タルアリ何レモ糸ノセニ繭形狀等ニ至
リ悉ク良品出来ス總テ伊國ハ掛合種ヲ用シ差ナ
キ時ハ糸ノセニイ不宜殊ニ虫ノ強蚕生力ヲトロウ
トノ説又蚕ヲ掃立ントスルニハ蚕箔ノ下ヘ毛トウ



シキ其上へ紙ヲ補キ其上



(イ) フラシテリ、ヲシキ
(ロ) 外へ枠ニテフラシテリ
(ハ) 其上へ枠ニテフラシテリ
(ニ) 其上へ枠ニテフラシテリ

而シテ發生蚕ノ上へも其位ノ

穴アル紙ヲ敷(アガツルシ)、其上へ壹分位ノ穴アル紙ヲかけ其上へ

二分余ノ短冊切ナル細長キ切桑ヲ与フ種目壹オンスナ

レバ巾ハ八寸長尺二寸位イノ紙十枚ヲ替リ、乗セ徐

々ト切桑ヲ掛ケ蚕兒ノ桑ニスカルヲ見テ別箔へ

移シ又穴紙ヲかける一度ニ紙式枚宛ニシテ五度

ヲシ掃終ルノ都合ナリ最モ掃立ノ期ハ午前八時

ヨリ九時迄ヲ良期トス桑葉ハ午前二取ザン時屋

外氣ノ冷桑ニ付着アルヲ暖ナル所ニテ去ラシメ

直ニ与フ初眠前裏抜ハ掃立テヨリ四十八時間ヲ

経過スレハ日々網ニテ蚕下ヲ去ル午後モ同断トス

又四月廿八日掃立タル虫五月十三日午後三眠始

マルアリ又与桑法ハ初眠前十一回位イ、ナル由又

中桑桑付法起蚕始マリ廿四時間ヲ越サル中桑ヲ

振ル是中桑ナリ午後モ同断取爾ハ壹オンスノ種

勿ヨリ得ル繭ハ八拾キ口位ナリト又繭才巢ヲ試

験ス無毒蚕ノ繭ヨリ蛾ヲ出シ先ニ繭巢ノ宜シキ

ヲ撰拔シ蛾ヲ顕微鏡ニテ調ヘ其糸質宜シキ繭ノ

蚕ヲ一蛾宛試験ヲナシ其ノ最モ強蚕ナルノミヲ元

卵トナシ其素卵ヨリ取り又調ヘテ翌年飼育シ夫

レハ蚕卵ヲ取各地方売買スト云フ又桑取雇人アハ

桑葉百キ口ニ付二法位ニテ渡ス又一人雇ハ一日

金六拾參ヨリ一法五十參位迄ナリト食物ハ種取

ノ外ハ悉皆自食トス最モ四眠起ナルトキハ昼食ハ

馳走スト云フ又●桑樹枝ヲ切り取ハ大該五年目

位宛差ナキトキハ桑葉ニ水分有リテ良繭出来セズ

ト云フ総テ桑葉ヲ用ユルヲ区分スレハ切シタル

葉ハ水分少ナキガ故若木若シキ小年々切取土故

掃立ニ用ユル葉ハ初眠位ナリト云フ総テ丸葉ノ

桑樹ハ植付ノ年ヨリ四ヶ年或ハ五ヶ年ヲ経ザレ

バ蚕兒ニ供セス是水分多力故ナリ因テ伊國一般

丸葉ノ種類ハ高株ニナシ五ヶ年目毎二枝ヲ●切ル

我力云フ立ドウシ是ナリ若シ是力年々枝ヲ切ル

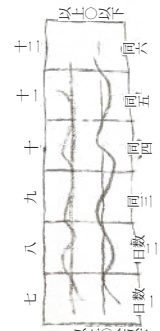
時ハ水分多キ為ジヨウ分少ナク又飼育ニ困難ナ

リト

シキ其上へ紙ヲ補キ其上
而シテ發生蚕ノ上へも其位ノ
穴アル紙ヲ敷(アガツルシ)、其上へ壹分位ノ穴アル紙ヲかけ其上へ
二分余ノ短冊切ナル細長キ切桑ヲ与フ種目壹オンスナ
レバ巾ハ八寸長尺二寸位イノ紙十枚ヲ替リ、乗セ徐
々ト切桑ヲ掛ケ蚕兒ノ桑ニスカルヲ見テ別箔へ
移シ又穴紙ヲかける一度ニ紙式枚宛ニシテ五度
ヲシ掃終ルノ都合ナリ最モ掃立ノ期ハ午前八時
ヨリ九時迄ヲ良期トス桑葉ハ午前二取ザン時屋
外氣ノ冷桑ニ付着アルヲ暖ナル所ニテ去ラシメ
直ニ与フ初眠前裏抜ハ掃立テヨリ四十八時間ヲ
経過スレハ日々網ニテ蚕下ヲ去ル午後モ同断トス
又四月廿八日掃立タル虫五月十三日午後三眠始
マルアリ又与桑法ハ初眠前十一回位イ、ナル由又
中桑桑付法起蚕始マリ廿四時間ヲ越サル中桑ヲ
振ル是中桑ナリ午後モ同断取爾ハ壹オンスノ種
勿ヨリ得ル繭ハ八拾キ口位ナリト又繭才巢ヲ試
験ス無毒蚕ノ繭ヨリ蛾ヲ出シ先ニ繭巢ノ宜シキ
ヲ撰拔シ蛾ヲ顕微鏡ニテ調ヘ其糸質宜シキ繭ノ
蚕ヲ一蛾宛試験ヲナシ其ノ最モ強蚕ナルノミヲ元
卵トナシ其素卵ヨリ取り又調ヘテ翌年飼育シ夫
レハ蚕卵ヲ取各地方売買スト云フ又桑取雇人アハ
桑葉百キ口ニ付二法位ニテ渡ス又一人雇ハ一日
金六拾參ヨリ一法五十參位迄ナリト食物ハ種取
ノ外ハ悉皆自食トス最モ四眠起ナルトキハ昼食ハ
馳走スト云フ又●桑樹枝ヲ切り取ハ大該五年目
位宛差ナキトキハ桑葉ニ水分有リテ良繭出来セズ
ト云フ総テ桑葉ヲ用ユルヲ区分スレハ切シタル
葉ハ水分少ナキガ故若木若シキ小年々切取土故
掃立ニ用ユル葉ハ初眠位ナリト云フ総テ丸葉ノ
桑樹ハ植付ノ年ヨリ四ヶ年或ハ五ヶ年ヲ経ザレ
バ蚕兒ニ供セス是水分多力故ナリ因テ伊國一般
丸葉ノ種類ハ高株ニナシ五ヶ年目毎二枝ヲ●切ル
我力云フ立ドウシ是ナリ若シ是力年々枝ヲ切ル
時ハ水分多キ為ジヨウ分少ナク又飼育ニ困難ナ
リト

シキ其上へ紙ヲ補キ其上
而シテ發生蚕ノ上へも其位ノ
穴アル紙ヲ敷(アガツルシ)、其上へ壹分位ノ穴アル紙ヲかけ其上へ
二分余ノ短冊切ナル細長キ切桑ヲ与フ種目壹オンスナ
レバ巾ハ八寸長尺二寸位イノ紙十枚ヲ替リ、乗セ徐
々ト切桑ヲ掛ケ蚕兒ノ桑ニスカルヲ見テ別箔へ
移シ又穴紙ヲかける一度ニ紙式枚宛ニシテ五度
ヲシ掃終ルノ都合ナリ最モ掃立ノ期ハ午前八時
ヨリ九時迄ヲ良期トス桑葉ハ午前二取ザン時屋
外氣ノ冷桑ニ付着アルヲ暖ナル所ニテ去ラシメ
直ニ与フ初眠前裏抜ハ掃立テヨリ四十八時間ヲ
経過スレハ日々網ニテ蚕下ヲ去ル午後モ同断トス
又四月廿八日掃立タル虫五月十三日午後三眠始
マルアリ又与桑法ハ初眠前十一回位イ、ナル由又
中桑桑付法起蚕始マリ廿四時間ヲ越サル中桑ヲ
振ル是中桑ナリ午後モ同断取爾ハ壹オンスノ種
勿ヨリ得ル繭ハ八拾キ口位ナリト又繭才巢ヲ試
験ス無毒蚕ノ繭ヨリ蛾ヲ出シ先ニ繭巢ノ宜シキ
ヲ撰拔シ蛾ヲ顕微鏡ニテ調ヘ其糸質宜シキ繭ノ
蚕ヲ一蛾宛試験ヲナシ其ノ最モ強蚕ナルノミヲ元
卵トナシ其素卵ヨリ取り又調ヘテ翌年飼育シ夫
レハ蚕卵ヲ取各地方売買スト云フ又桑取雇人アハ
桑葉百キ口ニ付二法位ニテ渡ス又一人雇ハ一日
金六拾參ヨリ一法五十參位迄ナリト食物ハ種取
ノ外ハ悉皆自食トス最モ四眠起ナルトキハ昼食ハ
馳走スト云フ又●桑樹枝ヲ切り取ハ大該五年目
位宛差ナキトキハ桑葉ニ水分有リテ良繭出来セズ
ト云フ総テ桑葉ヲ用ユルヲ区分スレハ切シタル
葉ハ水分少ナキガ故若木若シキ小年々切取土故
掃立ニ用ユル葉ハ初眠位ナリト云フ総テ丸葉ノ
桑樹ハ植付ノ年ヨリ四ヶ年或ハ五ヶ年ヲ経ザレ
バ蚕兒ニ供セス是水分多力故ナリ因テ伊國一般
丸葉ノ種類ハ高株ニナシ五ヶ年目毎二枝ヲ●切ル
我力云フ立ドウシ是ナリ若シ是力年々枝ヲ切ル
時ハ水分多キ為ジヨウ分少ナク又飼育ニ困難ナ
リト

一オンス蚕卵ヨリ発生スル処ノ虫ヲ掃立ノ際ニ
二メートルノ場所ヘ掃立ス此時立菅尺六寸五分
横二尺六寸四分ノ梓裏ヘ金巾ヲ張夫ヨリ
手当ハ前ニ述ブ上ノ図ハ梓二種粒ヲ並ベタル所
此上ニ前陳ノ如ク五寸位ノ穴アル紙網
ヲ二枚張其上ニ二分位ノ巾ナル冊短刻ミノ葉ヲ
与ヘ其葉ニ虫ノスガル厚飼加減ヲ見計ヒ其適度
ナルトキ網ヲ揚ケ又前ノ如ク次紙網ヲ掛ケ取
扱ヲ同シ五度網掛ケシテ掃終ルノ都合ナリ其坪
【図2】二メートル平坪二広ケ翌モ此假三日目
ヨリ日々紙網ニテ初眠迄裏抜ス午後初
眠ヲ起ルヤ直チニ紙網ヲ掛中桑ス且裏抜ハ熟蚕
迄扱ヒ法同断ナリ但シ中桑加減ハ起蚕ヲ見テヨ
リ二十四時間ヲ越スベカラズ



蚕種扱ヒ及人意ヲ
以テ氣候定メタル
目票其他天然ノ氣
候等ヲ記セシ表圖
ヲ示ス

又同氏ハ左図ノ
テ補理冬ニ至リ
養蚕器具ヲ此中ヘ収メ
エンサンセツカイヲ水ニ和シ器具ノ毒ヲ去ラシ
ムルナリ

又同氏ノ桑樹ハ木ノ丸サ三尺八寸平均ナリ但シ
壹本ノ収葉ハ百拾七キロラム(二畝六六畝ハ)則チ三拾
壹貫二百六拾二匁ナリト拾本ノ桑樹アレバ我カ
原紙一枚ヲ飼育セラル最モ大ナルヲカナ其作法
ハ高サ六尺上リ七本丸形ニ開キ次ニ其七本ノ先ヨ
リ又拾四本トナル則チ元一本
ニシテ先ハ十四ノ株ニ作ル

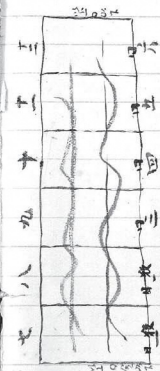


拾四本ナリ株

桑葉百キロ(二十六貫)伊國パトワ地方売買ハ五法以上
十法以下ナリト又伊國ミラン府地方相場同百キ
ロニ付六法位先平均ヲ見ル

同氏掃蚕卵量四十オンス(八匁位)ナリ是ヨリ得ル
蚕卵目量千五百オンス(十二匁位)但シ壹オンス蚕卵ハ
拾五法ナリト(三匁七十五錢)

一オンス蚕卵ヨリ発生スル虫ヲ掃立ノ際ニ
二メートルノ場所ヘ掃立ス此時立菅尺六寸五分
横二尺六寸四分ノ梓裏ヘ金巾ヲ張夫ヨリ
手当ハ前ニ述ブ上ノ図ハ梓二種粒ヲ並ベタル所
此上ニ前陳ノ如ク五寸位ノ穴アル紙網
ヲ二枚張其上ニ二分位ノ巾ナル冊短刻ミノ葉ヲ
与ヘ其葉ニ虫ノスガル厚飼加減ヲ見計ヒ其適度
ナルトキ網ヲ揚ケ又前ノ如ク次紙網ヲ掛ケ取
扱ヲ同シ五度網掛ケシテ掃終ルノ都合ナリ其坪
【図2】二メートル平坪二広ケ翌モ此假三日目
ヨリ日々紙網ニテ初眠迄裏抜ス午後初
眠ヲ起ルヤ直チニ紙網ヲ掛中桑ス且裏抜ハ熟蚕
迄扱ヒ法同断ナリ但シ中桑加減ハ起蚕ヲ見テヨ
リ二十四時間ヲ越スベカラズ



蚕種扱ヒ及人意ヲ
以テ氣候定メタル
目票其他天然ノ氣
候等ヲ記セシ表圖
ヲ示ス

又同氏ハ左図ノ
テ補理冬ニ至リ
養蚕器具ヲ此中ヘ収メ
エンサンセツカイヲ水ニ和シ器具ノ毒ヲ去ラシ
ムルナリ

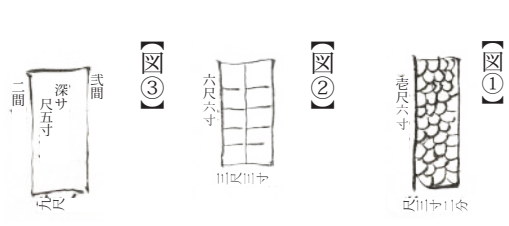
又同氏ノ桑樹ハ木ノ丸サ三尺八寸平均ナリ但シ
壹本ノ収葉ハ百拾七キロラム(二畝六六畝ハ)則チ三拾
壹貫二百六拾二匁ナリト拾本ノ桑樹アレバ我カ
原紙一枚ヲ飼育セラル最モ大ナルヲカナ其作法
ハ高サ六尺上リ七本丸形ニ開キ次ニ其七本ノ先ヨ
リ又拾四本トナル則チ元一本
ニシテ先ハ十四ノ株ニ作ル



拾四本ナリ株

桑葉百キロ(二十六貫)伊國パトワ地方売買ハ五法以上
十法以下ナリト又伊國ミラン府地方相場同百キ
ロニ付六法位先平均ヲ見ル

同氏掃蚕卵量四十オンス(八匁位)ナリ是ヨリ得ル
蚕卵目量千五百オンス(十二匁位)但シ壹オンス蚕卵ハ
拾五法ナリト(三匁七十五錢)



本日午後二時ニ至リメストレーへ帰宿ス
五月十四日 朝ヨリキリ雨終日小雨フル
寒暖計 本日ハ当地出立ニ記セズ
本日伊メストレー、午前五時出立同所ステーション
同五時三十分発車シ伊国ミラン府ニ赴此間里程
二百五十六キロメートルミラン府ハ当所西ニ
当ル午前七時パドワ・ステーションニ至ル此間ス
テ記セズ○同七時二十分 (印ハステーション) ○同七時三十分此間北
山ニ雪ヲ見ル○同八時○同八時十五分○八時二十
五分○同八時三十五分此間桑樹ヲ多ク見ル○八

